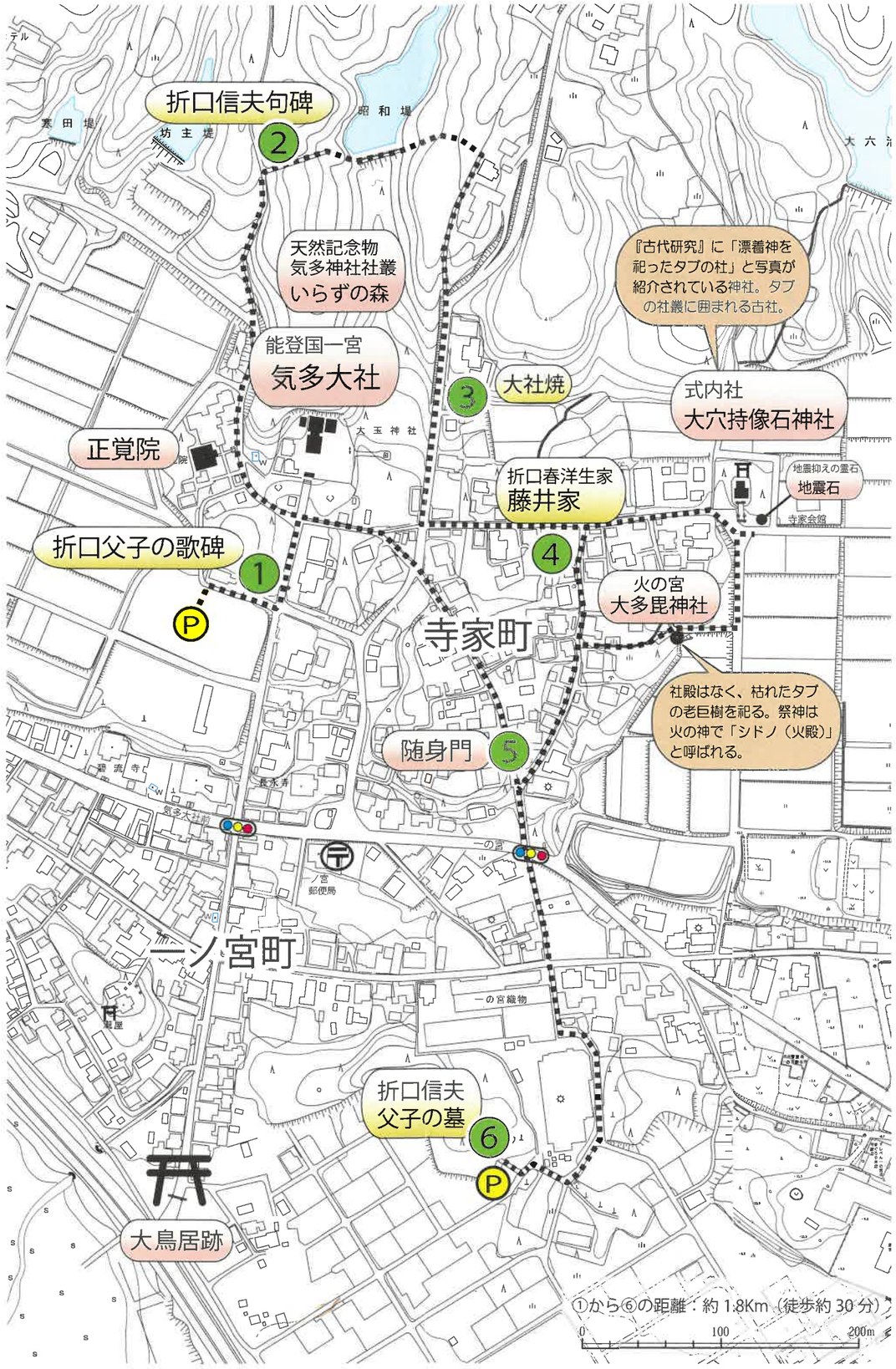
折口父子・碑めぐりマップ

折口信夫（歌人:釈迢空）が、能登の民俗採訪のため、初めて羽咋を訪れたのが、昭和 2 年（1927 年）6 月 26 日。その後も何度も羽咋を訪れ、創作や研究の足跡を残しています。羽咋には、折口信夫の養子となった國學院大學の教え子・弟子である藤井春洋の生家があることから、周辺には折口父子ゆかりの歌碑・句碑が建っています。これらをめぐり、折口父子の足跡を感じてみて下さい。



① 折口父子の歌碑

昭和 33 年 11 月 23 日旧一ノ宮駅に建立
昭和 43 年 8 月気多大社境内へ移設

折口信夫

「気多のむら 若葉くろずむ 時に来て
遠海原の 音を聴きをり」

昭和 2 年（1927 年）6 月、折口が春洋ら学生を伴い、初めて能登を探訪したときに詠まれた歌です。

藤井春洋

「春畠に 菜の葉荒びし ほど過ぎて
おもかげに師を さびしまむとす」

昭和 19 年（1944 年）、春洋が金沢陸軍歩兵連隊に面会に来た師の折口を思い、詠まれた歌です。

② 折口信夫の句碑

昭和 38 年 9 月 1 日建立

「くわっこうの
なく村すぎて　山の池」　迢空

碑面の句は、昭和 24 年 7 月に大社焼に立ち寄り、皿に自筆で書いたもの。折口没後 10 年に石碑が寄進建立された。

③ 折口信夫遺墨　大社焼の自筆陶器

「葛の花　踏みしだかれて 色あたらし
この山道を　行きし人あり」

昭和 24 年 7 月、大社焼の開窯時に立ち寄り、壺に自筆したもの。
歌人・釈迢空の代表作。
【歌集「海やまのあひだ」所収】

國學院大學所蔵資料

④ 折口信夫の歌碑　藤井家の庭内

「はくひの海　うなさかはるゝ　このゆふべ
妣が國みゆ　見にいでよ こら」

「うなさか」（海坂・海境）とは、海神の国と人の国との境界。海の果て。
「妣が國」は、折口の常世論における祖霊の住む他界。常世（とこよ）は海の彼方にある異世界。

個人宅のため非公開

⑤ 折口春洋の歌　随身門（歌集『鵠が音』から）

「酔い狂ふ　若集の肩に　もまれつゝ
安けくいます　随身の顔」

気多神社随身門は、旧参道の門守とされている。寺家町の祭礼の熱気と酔気のようすが伝わる一方で、気多の歴史と参道を守る随身像の静けさが対比的に描かれている。

⑥ 折口父子の墓

昭和 24 年 7 月 7 日建立

「もっとも苦しき たたかひに
最くるしみ 死にたる むかしの陸軍中尉
折口春洋 ならびに その父 信夫の墓」

春洋の硫黄島での戦死を嘆き、折口信夫が自ら墓碑銘を書き、昭和 24 年（1949 年）に春洋の生家藤井家の墓地に建てたものです。昭和 28 年（1953 年）9 月 3 日に没し、東京での百日祭後に弟子たちの手で、遺骨が納められました。